

## 使わなかった駅の入場券

高瀬駅に、いつも美しい生け花がある理由を知った数日後のことです。娘は夏休みに入っていました。「お父さん、夏休みの宿題で、『家族で、地域のために1日、何かする』っていうのがあるんやけど、何したらええと思う？」

と、突然、娘に相談されました。

「そうやなあ、何がええかな？道のゴミを拾うとか？」

と、(なかなか迷惑な宿題やなあと思いつながら) 適当に返事をしていて、はっと数日前の「駅の生け花」のことを思い出しました。

「そうや、高瀬駅の掃除に行こう。高瀬駅は、きれいやけど、よく見ると小さなゴミが落ちていたり、雑草が生えていたりしとんや。あのおばあさんに教えてもらたお礼や。高瀬駅がええわ！」

と、ということで、次の日曜日に、私と娘は、掃除道具やゴミ袋を持って、再び高瀬駅にやってきたのです。

駅員さんがいる時間帯で、できるだけ早い時を選んだのですが、そこは真夏のこと。太陽はカンカン照りで、とても暑い朝でした。

私は、駅に着くとすぐに自動券売機で「入場券」を2枚買っていました。その時、娘は車の中から掃除道具を取り出していました。

私と娘は、ちょうど改札口に立っていた駅員さんに、

「駅の掃除をしたいと思って来たのですが、ホームの所まで入ってもいいですか？」

と、たずねました。駅員さんは少し驚いて私たちを見ましたが、

「ああ、そういうことならどうぞ。何か申しわけありませんなあ、掃除していただくなんて。あっ、入場券はいりませんからね。」

と、私たちを通してくださいました。私は、入場券をポケットから出して駅員さんに渡そうとしていましたが、駅員さんの言葉を聞いて、あわててポケットの中に押し込みました。

一見、きれいに見えた駅のホームにも、小さなゴミはかなりのたくさん落ちていました。カンカン照りの中で、娘と私は、ゴミを拾ってゴミ袋に入れたり、ホームに生えている雑草を抜いたりしました。さすがに1時間も作業をすれば汗びっしょりです。少し休もうと思った時に、下りの電車が入ってきました。その電車の運転士さんは、ホームの掃除をしている娘を見つけて、娘に向かって敬礼をしてくれました。娘も、運転士さんに、へんてこな敬礼を返していました。

電車が出る時に、汽笛が鳴りました。きっと運転士さんが「ありがとう！」という代わりに鳴らしてくれたように思いました。このおかげで、少し元気が出て、それから30分くらいがんばって、私たちは、高瀬駅のホームの掃除を終えることができました。

家に帰ろうと、ポケットから車のキーを取り出そうとした時、入場券を買っていたことを思い出しました。私は娘に、

「これは、今日の記念や。」

と、その入場券を手渡しました。娘は、

「何や、お父さん、入場券、買ってたんや！」

とだけ答えて、その入場券を受け取りました。

それから9年が経ちました。娘は、19歳の春、東京の大学に進学するために、あの高瀬駅から電車に乗って出発していきました。娘の部屋には、勉強机だけが残されていました。私は、娘の机からセロテープか何かを借りようと机の引き出しを開けようとしてみました。すると、あの時の入場券が、娘の机の上の透明なシートに、しっかりと、はさまれていたのです。あの時に使わなかった駅の入場券が・・・。

私は高校3年生の3月、とても落ち込んでいました。それは、受験した大学の全てに落ちてしまったからでした。結構、自信があり（今にして思えば自信過剰）、私は第一志望の大阪の大学に行くことができるものと信じ切っていましたし、もし、そこがダメでも、第二志望の東京の大学はきっと大丈夫だろうと思込んでいたものでしたから、かなりなショックを受けました。その上、友達のほとんどが、大学に合格して、東京や大阪などに出発して行くのを見送っていると、一人だけ取り残されたみじめな気持ちになり、「こんなことなら、もっと必死で勉強しておけばよかった。」と後悔ばかりの毎日でした。

さて、予備校でも探さなければ、もう後が無い、1年後に向けてがんばろうと少しだけ前向きな気持ちに変わった3月30日。一本の電話がかかってきました。「入学予定者が辞退したので、あなたを補欠合格にします。入学の意思があれば、明日の14時まで連絡してください。それまでに連絡が無ければ、入学の意思は無いものと判断いたします。」と、まるで機械のように事務的な内容の電話でした。

私は、とても迷いました。それは、その大学が自分の志望する大学ではなく、第一志望の大阪の大学を受験した際に、たまたま近くに試験会場があった山梨県の大学だったからです。それも担任の先生から無理矢理受けておけと言われて、「どうせ暇だから、ついでに受けておくか。」程度の（大変失礼な）気持ちで受験した大学だったのです。

決めるための時間が無いというのは、いいようにも悪いようにも働きます。結局、「もう受験勉強するのも面倒くさいし、この大学に行くか…。東京にも近いし…。」ということで、私は、それから3日後に、香川を発つことになったのです。

当時は、瀬戸大橋はありませんでした。高瀬駅から汽車（電車ではなくディーゼルカー）に乗って高松駅へ、そこから宇高連絡船という船で宇野まで、そこからまた汽車に乗って岡山へ、そして新幹線で東京駅へ。朝7時頃に高瀬駅を出発し、東京駅に着いたのが午後4時前でした。（今なら高瀬駅から東京駅までは4時間～5時間）しかし、そこからが、まだまだ遠かったのです。中央線で終点の高尾に行き、その後、中央本線に乗り換えて大月駅へ、最後に、富士急行線に乗って谷村駅（山梨県都留市）へ。着いたのは、家を出て12時間後の午後7時頃でした。東京では高層ビルに圧倒されましたが、西に向かうたびに、だんだんと建物は無くなり、電車はどんどん高い所に向かっていきます。やがて山と川しか見ることができなくなり、着いたのは、都会ではなく、高瀬とあまり変わらない、いや、むしろ高瀬より田舎の町だったのです。その上、4月というのに香川の2月より寒いのです。そこは標高500～600mくらいの町だったのです。香川で言えば、結構高い山の山頂くらいの所なのです。

私は、この暗い小さな駅の前で、たった一人、周りを見ていました。駅前だというのに真っ暗なのです。やがて涙がこぼれてきました。「この町で、誰一人知っている人がいないこんな所で、これから4年間も暮らしていくのか。」これからの新しい生活に対して、わくわくした気持ちは全くなく、理想としていた大学生活とは真反対の現実を目の当たりにしたからです。

私は、一旦、東京まで戻り、大都会のホテルに泊まり、華やかな街や、大勢の行き交う人を見ながら、3月30日の安易な選択を後悔していました。

それでも翌日、私はその駅前の小さなアパート（寮みたいな下宿、4畳半の部屋で、トイレ・調理場は共同、風呂無し→近くの銭湯へ、月の家賃8,000円）に住むことを決めました。そのアパートには、私を含め新入生が3人（鹿児島、岩手、香川出身）と、先輩が3人の6人が住み、共同生活を始めることになったのです。

この町は、とにかく「寒い町」でした。5月、6月、いや7月でも夜はセーターが手放せません。でも、夏はとても涼しいのです。避暑地で有名な山中湖や河口湖にとっても近い町なのです。クーラーは、（当時は）一般家庭には必要ありませんでした。真夏でも、窓を開けると、クーラーより涼しい爽やかな風が流れ込んできます。そんな気候の両面に気付いた頃、この田舎の小さな町の良さにも気付き始めていました。

ところが、事件はその年の12月に起こってしまいました。私は、夜中に目を覚ましてトイレに行ったところ、流しの蛇口から、ちょろちょろと水が流れ出ているのに気付きました。そこは、水不足の香川県人です。しっかりと蛇口を閉めて、これは皆のためにいいことをしたと満足して眠ったのです。

翌朝、流しの辺りで、騒ぐ住人の声で目を覚ましました。そして私が見た光景とは…。(次号につづく)

ところが、事件はその年の12月に起こってしまいました。私は、夜中に目を覚ましてトイレに行ったところ、流しのじゃ口から、ちょろちょろと水が流れ出ているのに気がきました。そこは、水不足の香川県です。しっかりとじゃ口を閉めて、これは皆のためにいいことをしたと満足して眠ったのです。

翌朝、アパートの流しの辺りで、さわぐ住人の声で目を覚ましました。私が見た光景とは…。

私以外の住人が、このアパートに1つしかない流しの所に集まっていました。

「早く、お湯をわかせ！ そうだ、じゃ口にかけて！ まだ水は出ないか？ 次は直接、水道管だ！」

何と、室内の水道管が凍り付いてしまったのです。その原因は、私がじゃ口を閉めたからなのです。

「おい、真鍋。もしかして夜中に、水道のじゃ口を閉めなかったか？」

何のさわぎだろうと、流しの所に来た私に、大学4年生の野村先ばいが、こわい顔で聞きました。

「閉めたけど、それがどうかしたのですか？」

「バカやろう、こんな寒い日に水道のじゃ口を閉めたのか。夜の間に、水道管が凍り付いてしまったぞ。」

他の住人も、いっせいに私の顔をにらみつけています。

「お前なあ、このはり紙、見えなかったのか？」

流しのかべの所には、11月の終わりまではなかった「凍結防止（とうけつぼうし）のため、冬の間は、水道の水を完全に止めないこと」と書かれたはり紙があるのに、その時初めて気が付いたのです。

「凍ったんですか？」

「お前が、凍らせたんだ。この辺りは、室内でも朝方は、氷点下になるんだぞ。流れていない水は凍ると学校で習わなかったのか？ 一度凍ると、水道管はその氷が溶けるまで、下手すると春まで、水は出ないんだ。今朝、凍り付いたばかりだから、まだ、間に合うかも知れない。お前は、部屋からドライヤーを持ってきて、この水道管を温めろ！」

私は、とんでもないことをしてしまったのです。香川県では、節水としてほめられる行いが、ここでは、大きな迷惑行いとなってしまったのです。私は、部屋からドライヤーを持ってきて、ガーッと、ガーッと、温風を水道管に当て続けました。他の住人は、お湯をじゃ口に向け続けています。

やがて、ちょろちょろと細く、水がじゃ口から出始めました。そして、またたく間に、その流れは太くなり、やがて、勢いよくザーッと流れ出たのです。

「よし、もう大丈夫だ。良かった、間に合った。なあ、真鍋。これからは気を付けてくれよ。」

多少、優しくなった先ばいの言葉に、私はがくりと床にひざをついてしまったのです。冬の間は、水道のじゃ口は決して止めてはいけないということが、私の頭にたたき込まれたしゅん間でもありました。

ついでに、この町では、いろいろなことを学びました。寒い時は、暖房を入れていなければ、室内でもマイナス5℃くらいにはなりません。寝る前に飲み残したお茶をこたつの上に置いたままにしておくと、朝、凍っているということもありました。そうそう、こんなに寒いのに冬の間も、冷蔵庫は必需品です。冬の間、冷蔵庫は、冷やすためではなく、凍らせないために働いてくれるのです。冷蔵庫の中の方が、夜間の部屋より温度が高いのですから。

近くの銭湯（おふろ屋さん）から、髪を乾かさずに帰ると、家に着くまでに髪の毛がカチンコチンに凍り付いてしまいます。どこかに凍った髪をぶつけてしまうと、ポキンと髪の毛が折れてしまうこともありました。髪がとける（普通はこんな経験はしないが）と、折れた部分だけ、毛が無くなっているのです。

町の用水路には、1年中、水がゴウゴウと音を立てて流れています。富士山の雪解け水です。水道代は、当時、日本一安かった地域でした。冬の間、ずっと水道を止めなくても、香川県の水道代の10分の1くらいの値段しかしなかったと思います。

とにかく寒い町でした。冬の間は、寒すぎて眠れず、こたつの中で眠ったことも何度もありました。でも、この寒さに少し慣れた頃、私は、大嫌いだったこの町を「第二のふるさと」として愛するようになっていました。今、考えたら、本当に貴重な経験をさせていただいたと思います。

## おじいさんと、おばあさんの盆休み

今年の盆休み。おじいさん、おばあさんの家への帰省（里帰り）を控えたという方も多かったのではないのでしょうか。報道で、そのようなニュースが流れると、私は、ずいぶん前のことですが、姉の帰省のことを思い出します。

4歳年上の姉は、大学を卒業してすぐに結婚しました。それからは、ずっと大阪や滋賀で暮らしています。姉には、女の子と男の子が1人ずついて、お盆の頃には必ず2人の子どもを連れて帰省していました。

お盆が近づくと、いや、7月になったら、うちの父（おじいさん）と母（おばあさん）のお盆休みの準備は始まります。

「子どもたちが大きくなったから、布団を買い換えないといかんなあ。」

「そうや。2階の部屋のエアコンも、効きが悪いから、新しいのを買うか。」

年間に、数日しか使わない布団を買い換える？まだ十分使うことができるエアコンを買い換える？当時の私には、なかなか理解できないことでしたが、両親の思い切りのよさには驚かされました。両親は、普段は、実に「質素・儉約」な生活をしていますが、この時ばかりは、思い切りがいいというか、気前がいいというか……。娘と孫が帰省する1か月以上前でも、このような状態ですから、1週間前になるとどうなるのかは、皆様も想像がつくと思います。とにかく、これでもかというくらいに掃除をします。冷蔵庫には入り切らないほどの飲み物や食べ物を買ってきます。ある年などは、入り切らない食品のために、もう一つ冷蔵庫を用意したこともありました。もちろん、当時、若かった私の家での仕事も、この時期になると急激に増えたものでした。まさに、エンジン全開の状態です。

そうして、娘と孫たちの帰省の日がやってきます。高瀬駅に迎えに行き、「おじいちゃ〜ん、おばあちゃ〜ん！」と、さけびながら走り寄ってくる孫たちの姿を何か月も楽しみに待っていた両親の幸せな時間が始まるのです。普段は、どこそこが痛い、めまいがすると嘆いている母から、この期間、そんな言葉は、一言も聞いたことがありませんでした。

専業主婦の姉は、帰省しても子どもの世話や家事をがんばっていました。

「お姉ちゃんは、いつも一人で家事や子育てをがんばっているんやから、家に帰った時くらいは何もせんでええよ。」

と、母は姉に言います。もちろん、姉が、手を止めることはありませんでしたが……。父と母の準備というのは、孫たちを迎えるだけではなく、嫁いだ姉が、数日間、娘に戻るための準備でもあったのです。

姉とその子どもたちの帰省は、子どもが幼い時ほど長く、大きくなるにつれて、段々と滞在期間が短くなっていきましたが、どの年も、楽しい時間はあっという間に過ぎ去ってしまいました。

「また、おいでよ。待っとるからね！」「おじいちゃん、おばあちゃん、また来るからね！」

高瀬駅で孫たちを見送り、いっしょに行っていた私に向かって、母は毎年、必ずこう言いました。

「あーっ、ほっとした。姉ちゃんや孫たちが帰ったから、これでやっと休めるわ。」

私には、「ああ、さみしい。姉ちゃんや孫たちが帰ってしまったら、気が抜けてしまったわ。」としか聞こえませんでした。その日から、おじいさんと、おばあさんの本当の盆休みは始まるのです。

あれから数十年。その姉も、おばあさんになりました。姉の娘は、2人の子どもの母親です。下の子ども、昨年、結婚しました。そういうことで、姉は、盆やお正月には帰省してこなくなりました。それは、姉が、姉の子どもたちの「ふる里」になったからですね。

## 夏休みの美術の作品が入選してしまったこと

あれは、私が中学3年生だった8月31日のことでした。毎年このように「今日で夏休みが終わるというのに、まだ宿題がたくさん残っている。あ～あ、なぜ、もっと計画的にしなかったのか。とても、明日までには終わりそうもないなあ…」と、出るのは後悔の気持ちがいっぱいだった、ため息ばかりでした。

それでも、がけつぶちに立つと力も出るものです。夜の10時頃には、あと1つの宿題を残すまでになっていました。しかし、あと1つというのが大問題でした。残っているのは工作か四つ切画用紙に絵をかく宿題でした。「今から絵をかいていたら、朝までには終わらない。こうなったら工作しかない。」あまり絵をかくのが得意ではなかった私は、夜の10時から工作に取りかかったのです。しかし、時間が時間だけに、まともに工作に取りかかっては、ぜったいに間に合いません。材料を買おうと思っても、お店はどこも開いていません。そこで、「何か、家に工作の材料となるものはないかな？」と、おし入れの中を探し始めました。すると、段ボールの箱の底から、木の板を彫刻刀(ちょうこくとう)でほって「忍耐」という字を浮かび上がらせた、いかにも手作りという姉の作品を見つけました。「忍耐」とは「(にんたい) 苦しさやつらさに、がまん強くたえしのぶ」という意味です。姉が中学生の時に、美術の時間に作ったとは聞いていました。「これは使える！」そう考えた私は、その近くにあった板と赤い布をいっしょに取り出して、「姉の作品」には黒と銀色の絵の具をぬり、板には赤い布をはりつけて、裏から「姉の作品に色をぬった物」をくぎで打ちつけ、わずか30分ほどで、工作の作品を完成してしまったのです。

始業式から1週間が過ぎました。「あっ、真鍋君。美術の先生が、帰る前に職員室に寄るようになって。」と、担任の宮武先生から声をかけられました。私は、はっとしました。悪いことはできないものです。きっと、美術の先生は、長い間この中学校にいるから、4歳年上の姉が作ったあの作品のことを覚えていたのでしょう。とても厳しい先生です。これは大変なことになると青ざめた顔で、私は職員室に入りました。

ところが、「おお、真鍋君。わざわざご苦労さん。いやあ、君の夏休みの工作。実に素晴らしい作品だったよ。さぞ、時間がかかっただろうね。それでだ、君の作品を展覧会に出すことにしたよ。」と、全く思っていたのとは逆の言葉を美術の先生からかけられたのです。ずるがばれなかった安心感で、私は、本当のことを言うことができませんでした。そして、「まあ、展覧会に出したところで、入選するはずもないし、参加賞をもらって終わりだ。」という軽い気持ちもわいてきました。

悪いことはできないものです。それから1か月ほど経って、また、美術の先生から呼び出されました。「真鍋君、おめでとう。君のあの作品、特選に選ばれたよ。1番だよ。いやあ、よかった。よかったなあ。」

私は、こんなに悲しい知らせをそれまで聞いたことがありませんでした。大変なことになってしまいました。その場でも、いや、こうなったらかえって、本当のことは言えなくなってしまったのです。

それからのことは…。全校集会で、私一人だけがステージに呼ばれ、校長先生から特選の賞状をいただきました。全校生の大きな拍手が、私を責めているように聞こえました。私の作品が中央に置かれている作品展の案内をいただきましたが、もちろん行きませんでした。両親からは「そんな人間に育てた覚えはない！」と、こっぴどくしかられ、姉からは、「あんた、何してくれとん、はずかしいと思わんの？」と責められ…。おそらく賞状も捨ててしまいました。私の「忍耐」の日々は、こうして続きました。

それからしばらくして、私は、担任の宮武先生に、放課後、あの作品を持って真実を打ち明けました。宮武先生は、数学の若い女性の先生で、私たちが卒業すると、結婚のため教師を辞めて九州に引っ越すことが決まっていました。「ふーん、そうなんや。でも、私は、これは真鍋君の作品だと思うよ。確かに字をほったのはお姉さんだけど、色をぬって板に布を張りつけて完成させたのは、君のアイデアで、君が作業したのだからね。気にすることないよ。」と、おっしゃってくださいました。そして、「この作品、気に入ったから先生がもらうわ。ありがとう。」と、私の返事も聞かずに、先生はその作品を持って行ってしまいました。

ですから、私は、あの作品をあの時以来見たことがありません。見なくてすんだのかもしれませんが。

もしかしたら、今も、あの作品は、九州の宮武先生の家にあるのかもしれませんが。

私が、この話を書けたのも、60歳を前にして工作が大好きなもの、きっと宮武先生のおかげですね。

## 本当にあった「こわい話」

これは、私が幼い頃、父親から聞いた、本当にあった「こわい話」です。

私の父は、現在、89歳です。その父がまだ若かった頃のことでですから、今から60年くらい前の話になるのでしょうか。60年前というと、自動車どころかオートバイでさえ、ほとんど走っていません。田舎の道には街灯（がいとう）などありません。つまり、夜になると、民家がない道では、月明かりがない時は、本当に真っ暗になるのです。峠（とうげ）の道は、まさにそんな場所だったのです。

当時、父は、詫間の家から仁尾の仕事場まで自転車で通勤していました。詫間から仁尾に行くには、峠道を越えなければいけません。その出来事は、ある冬の夜。月明かりの全くない峠の頂上付近で起こったのです。

「ああ、真っ暗だ。こわいなあ。もう少しで峠の頂上だ。下りは一気に走ろう。」と、自転車を押しながら父が思った瞬間、峠の頂上付近に小さな明かりが見えました。「自転車だな。俺以外にも、こんな真っ暗な中を走っている人もいるんだな。」と、少し安心していましたら、その光は、ものすごいスピードで父に近づいてきました。そして、その自転車が父の横を通り過ぎようとした時、父は、ギラリと光る鋭い目と、毛むくじゃらで、口が耳の辺りまでさけた顔をしたオオカミのようなものが自転車に乗っているのを見てしまったのです。父は、おそろしくて声も出なかったそうです。「あれは、いったい何だったのか。化け物か。今度会ったら、食べられてしまうかもしれない。」そんな恐怖（きょうふ）がありながらも、父は、次の日の夜も、その峠道の頂上付近に自転車を押しながらさしかかっていた。この道を通らなければ、ものすごく遠回りになってしまうからなのです。「今夜は、どうかあの化け物が出ませんように。」と、普段は全く祈ることもない神様や仏様に念じた時でした。昨夜と全く同じ場所に、父はあの光を見てしまったのです。父は、こわくて、こわくて、自転車を止めて道ばたでじっと息をひそめていました。その光は、昨夜と同じように猛スピードで近づいてきます。父は、顔をふせてじっとしていました。ヒューンと風が父の髪を吹かした時、獣（けもの）のような特有のにおいもただよってきました。「ああ、行ってしまった。気付かれなかった、よかった。」と、父は、一目散に家に急ぎました。

その次の夜。父は、また同じ峠道を通っていました。しかし、今夜は頂上に着くまで、あの光はありませんでした。「ああ、よかった。今夜はいないぞ。」と思った瞬間。何と目の前に小さな光があるではありませんか。「もうだめだ。見つかった！」と思った父は、とっさの行動に出ました。それは、目を閉じて、大きな声で「こんばんは！」とさけんだのです。すると、「こんばんは！」と返事がありました。父は目を開けて驚きました。向こうの自転車には、父と同じくらいの年齢の男の人が乗っているではありませんか。よく見ると、その男の人の背中には、大きな黒い犬が乗っているのです。大きな犬なので、男の人が頭を少し下げると、犬の頭の方が、上になり、まるで犬が自転車に乗っているかのように見えるのです。

「こんばんは。犬を乗せて走っていたのですね。私はてっきり・・・。」

と、父はあらためてあいさつしました。

「いやあ、こんばんは。あなたでしたか。私も、さっきまで自転車の灯りが見えていたと思ったのに、急に見えなくなって、人の気配も消えてしまうので、こわくて仕方なかったんですよ。」

父と、その男の人は、峠の頂上で自転車を止めて笑い合ったということです。ちょうど、その時に、久しぶりに雲の間から月が出て、二人と犬を照らしていたそうです。

私が「どうして、あいさつしないといけないの？面倒くさいし、はずかしいし。」と父に聞いた時に、答えの代わりに、この「こわい話」をしてくださいました。「あの時、もしあいさつをしていなかったら、お父さんもあの男の人も、お互いに相手を『こわい』と思ったままだったかもしれないね。」と、父は笑いながら話を締（し）めくくってくださいました。

今、詫間小学校では「あいさつキャンペーン」が行われていて、気持ちのよいあいさつが飛び交っています。その声を聞いていると、私が幼い頃、父から聞いた話を思い出してしまいました。

### 私が30歳を過ぎてピアノの練習を始めた理由

だいぶ前の「独り言」で、「ピアノ、習字、そろばんの習い事」がクビになってしまったという話を書きました。そして、ピアノは、30歳を過ぎてから、独学（どくがく：誰にも教わらずに自分一人で学ぶ）で練習を始めるようになったということも書きました。今日は、その理由についてお話しします。

私は、大学を卒業してすぐに学校の教員になりました。最初の4年間は、三野町の大見小学校に勤務したのですが、次に転勤したのは高松市の中心部にある大きな学校でした。その学校で、私は4年赤組（白、青、赤、黄組の1学年3～4クラスがあった）の担任をしていました。その学校は、児童の転出入が多くて、学期末には、決まって1クラス、数名の子どもたちが転校していきました。Aさんという女の子も、私が1学期間だけ担任して夏休み前に転校していきました。

後1週間くらいで1学期の終業式というある日の夕方。すでに1学期末で転校することが決まっていたAさんのお母さんから電話がありました。

「先生に、お願いがあって電話しました。1学期の終業式を最後に、うちの娘は転校するのですが、娘は毎日、ピアノの練習を一生けん命しているんですよ。どうやら、終業式の後のお別れ会の時のために練習しているみたいなんです。先生もご存じのとおり、うちの娘は人前では上手に話すことができませんので、みんなの前に出てきくと、お別れの言葉も言えないと思います。娘は、言葉の代わりにピアノでお別れの気持ちを伝えようとしているのだと思います。そう娘が思っている、そのことを自分から先生に伝えることはできないと思います。親バカだと笑っていただいても結構です。何とか、娘の思いをかなえてやりたいと思って、勝手なことは承知の上で電話をしました。」

Aさんは、お母さんの言うとおりに、授業中に手を挙げて発表したことは一度もありませんでした。私が指名しても、だまっただまうつむいて、何も言わないということがほとんどでした。休み時間に、仲の良い友達とはお話をしますが、私が話しかけても、うなずくか首を横に振るかしかしませんでした。きっと、お別れ会の時も、クラスの前に出て話すことができずに立ちすくんでしまうと思います。そのAさんが、最後にピアノを弾いてお別れの言葉に代えたいというのです。私は驚きました。

終業式の後、Aさんを含め3人の転校していく友達とお別れ会をしました。ゲームをしたり、手作りのプレゼントを渡したり・・・。45分しか時間を取ることができませんでしたが、楽しい会でした。お別れ会の最後に、転校していく子どもたちに、お別れのあいさつをしてもらいました。Aさんは、やっぱり何も言わずに、軽く頭を下げただけでした。

いよいよ帰る準備ができて、「さようなら」という時に、私は、クラスの子どもたちを音楽室に連れて行きました。「先生、どこに行くの?」「早く帰らせてよ!」「他のクラスは、もう帰ってるし!」と、文句を口々に言っていた子どもたちも、

「Aさんは、今日で転校しますが、最後にどうしてもみんなにピアノを聞いてもらいたいと一生けん命練習してきたそうです。1曲だけ、聞いてから帰ってください。」

という私の言葉に、シーンとしました。その静かな音楽室に、Aさんがピアノに向かって歩く足音だけが響きました。

Aさんは、フーツと深い息をはいてから、とても美しい曲を演奏してくれました。曲の名前は分かりませんが、私には、いやクラスのみんなにも、「さようなら。これまで仲良くしてくれてありがとう。私のことを忘れないでね。私もみんなのことは絶対に忘れない。」と言っているように聞こえました。ましがいなく、そう聞こえました。

私はこの時、ピアノってすごいなあ、自分もAさんのように、1曲だけでいいからピアノを弾けるようになりたいなあと心の底から強く思いました。

そういうわけで、幼い頃、クビになったピアノを、私は30歳を過ぎてから、独学で練習を始めるようになったというわけです。「おじさん」になってから、気が向いた時だけ練習し、しかも独学ですから、大したことはありませんが、ほんの何曲かは弾けるようになりました。もし、機会があれば、私の少ないレパートリーの中の1曲を、いつか皆さんにも聞いていただきたいと思います。

ちなみにAさんは大きくなってから都会で「ウェディングプランナー」のお仕事をしています。何と、お客様と話し合ったり、大勢の人の前で話したりすることが中心のお仕事だそうです。